日本の英語教育におけるIPAリテラシーという問題

杉　野　健太郎

IPAリテラシーという問題

私は，大学で専任教官として英語を教えるようになって現在10年目である。この10年間を通して，いや，中・高校そして大学で英語ならびに英語英米文学教育を受けるようになってから，日本の英語教育に関してずっと気になっていることがある。それは，日本の英語教育におけるIPA（International Phonetic Alphabet＝国際音声字母あるいは国際音声文字）リテラシーという問題である。

IPAとは，現在日本で刊行されている英和辞典のほとんどすべてに採用されている発音記号のことである。これは，1886年に設立された国際音声学協会（International Phonetic Association）が制定したものであり，現在日本で使われているものは多少の違いはあるがこれに基づいている。日本で用いられている発音記号は，主にJones方式のIPAによっている（今里・土家107)。このIPAがなぜ気になるかといえば，私自身このIPAを一度も学校で習ったことがないからである。いや正確に言えば，ほんの少しならったというのが事実であろうか。いずれにせよ，中学・高校・大学さらには大学院の英語に関する教育においてIPAを体系的に習ったことは間違いなく無い。

調　査

この自分の経験から，平成4年4月に広島大学総合科学部に赴任して以来ずっと（平成9年9月に信大人文学部に転任しても)，ほとんどすべての教養の英語のクラスの学生（1・2年生）にIPAが読めるかどうかをたずねることを習慣としていた。最初のうちは，挙手で聞いていた。そのデータは取っていなかったし聞き方もあいまいであったが，「入学前に少しでも発音記号を習った人」との問いに挙手するのは3割から4割，「ほぼ完全に辞書の発音記号を読める人」との問いに挙手するのはクラスに一人くらいであった。たとえば，熊本高校などの全国的な進学校でもIPAを教えていないことが分かった（ただし，学校だけでなく先生によっても違いがあるので一概には言えない)。また，ある広島のミッション系女子中高の卒業生は体系的にIPAを学習していることなども分かった。この挙手によるアンケートの結果，1年生には必ずクラスで最初の数回の授業を使ってIPAを体系的に教えることを習慣とするようになり，さらには平成7・8・9年度にアンケート（テストを含む）を実施した。アンケートとその結果は，資料として最後に掲げた。また，平成10年度に信州大学の学生にも同様のアンケートを実施したが，広大と信大における私の担当クラス数に違いがあったため信大のアンケートは実施対象に違い（信大の対象は広大より高学年の学生が多く，しかも英語関係専攻の学生が多かった）がある。そのため，広大のアンケートを中心に吟味してみよう。データは基本的に広大のものである。

《高校時代のIPA学習について》

高校時代にIPAを学習しなかった学生は，ほぼ毎年40%前後であり，学習した学生もほぼ毎年60%前後であった。平成6(1994)年4月より学習指導要領が改訂になり施行された，すなわち，平成9(1997)年3月高校卒業生より新たな英語教育が実施された。だが，平成9年度高校卒業生とそれ以前の高校卒業生のIPA学習に関しては，ほとんど差がなかった。また，IPAの学習程度に関しては，体系的に学習したものは稀で，ほとんどが受験問題を通して学習したとのことである。受験問題の発音に関する問題の解答などのときにほんの少し説明と受ける程度，したがって，「学習した」とは言いがたい程度，と言えるだろう。また，どこで学習したかに関しては，やはり高校がほとんどであった。

以上のデータから明らかなのは，高等学校では体系的にIPAを教えてはいないということである。学習指導要領には，『高等学校学習指導要領』に「音声指導の補助として，発音の表記を用いて指導するよう配慮するものとする」(109) とあるのが，IPAに関連する唯一の記述である。ちなみに，高校の英語の教科書にはすべての単語の説明のあとにIPAが表記されている。いずれにせよ，「配慮」はしているようだが，IPAリテラシーの習得までは指導していないようである。

《高校卒業後のIPA学習について》

高校卒業後のIPA学習に関しては，毎年20%前後の学生が学習したと答えた。しかし，やはり体系的に学習した者は，そのうちの10%に満たない。学習場所は，大学が多い。体系的に学習したと答えたものが少ないので，授業中に教師が発音の訂正をする程度ではないかと予測できる。ちなみに，平成10年度に信大で行った調査では，他の点では殆どデータに違いはなかったが，高校卒業後のIPA学習に関してだけ大きな違いがあった。信大の学生は45%が高校卒業後IPA学習を行ったと回答したが，これは英語英米文学関係を専門とする学生が対象に多かったためだと思われる。

《IPAリテラシーについて》

つぎはIPAリテラシーに関してである。IPAリテラシーを細かく分けると次の三要素に分けられるだろう。1）綴りを見て発音できるか（調音)。2）実際の発音を聞き分けられるか（聴覚)。3）発音記号を見て正しく発音できるか（発音記号の識字)。1）調音に関しては，重要発音を平均して40%近くが発音できないと答えている（この調査に関しては，インタヴュー・テストを行うのが好ましいが時間の都合で自己申告のアンケートとした)。とりわけ，read（[r]）とlead（[l]）に関しては，3分の2近くの学生が発音できないと答えた。2）聴覚に関しては，弁別問題ではなくて同定問題で行った。しかも選択肢は二つしかない。したがって，あてずっぽうに答えても正答率は50%である。おおまかに言って三分の一の学生が聞き分けができていない。read（[r]）とlead（[l]）に関しては，誤答率がほぼ50%なので，まったく聞き分けができないと考えていいだろう。次に3）識字である。これは，ローマ字と異なる発音記号の識字に関する問いの結果である。ばらつきはあるが，平均して50%近くの学生が識字できないと答えている。

結　論

以上の調査には更なる検討などが必要であるが，少なくとも確実に言えることは，日本の

大学生には十分なIPAリテラシーがあるとは言えない。また，学校教育においてIPAリテラシーを体系的に行っていないということである。もちろん，IPAリテラシーがなくても英語のReadingとWritingはできるし，ListeningとSpeakingだって問題ない場合がある。問題ない場合といっても，それは，英語を母語とする人たちの場合である。彼らは，IPAを読めない場合がほとんどであるが，英語の基礎的な音を幼少時に習得しているからである。このことは，英英辞典の発音表記に現れている。ネイティヴ向けの英英辞典の発音表記はまちまち（今里・土家106—107）だが，一つの共通点がある。それは，英語の基礎的な発音ができることを前提に表記されていることである。たとえば，*Webster New Collegiate Dictionary*では，IPAの[æ]は，aという記号で表してあり，mat，map，mad，gag，snap，patchなどの下線部と同音と指示されている。もちろん，この表記は，基礎的な発音ができることを前提としているため，基礎的な発音さえ不確かな日本の大学生向けではない。

したがって，基礎的な発音ができない日本の学生にとってはIPAが適当だと言える。しかし，IPAの識字率に関しては上述した通りであり，辞書を引いても単語の正確な発音ができないというのが実情である。綴りと発音がほぼ法則通り正確に対応するドイツ語などでは辞書を引かなくてもいいではないかという意見もあるかもしれない。だが，もちろん，英語に関しては，綴りと発音の乖離という大問題（この歴史的事情に関しては，たとえば渡部252—62を参照のこと）がある。英語というのは，つくづく思うが，綴りと発音が乖離した言語であり，両者の間にはほとんど法則性はない。簡単な単語でも辞書を引く必要がある。たとえば，choirという単語が綴り字から判断して/kwáiər)/と発音すると分かる人はいないだろう。この綴りと発音の乖離という問題がある故に，日本の英語学習者はもちろん，ネイティヴ・スピーカーでさえ発音を確かめるために辞書を引く必要があるのである。

さて，現在の日本の英語教育のトピックとなっていることのなかで，このIPAリテラシーと関係があるのは，臨界期と小学校への外国語（英語）教育の導入である。臨界期（critical period）とは，その年齢を過ぎると新しい言語の習得が困難になる時期（安藤109）のことであり，言語の音声以外の側面ではその存在を疑う者が現在は多い。しかし，残念ながら音声面に関しては臨界期が存在し，しかも他の側面によりも臨界期が早いとの見解が強い（たとえば，土屋24—26，河合，白畑を参照のこと）。しかし，その臨界期が何歳かに関しては定説はない。日本の英語学習者がこの臨界期より前に英語の音声的側面を学習すればネイティヴ・スピーカーなみのspeaking力とlistening力の基礎を習得できるかもしれない。そうすると，1996年7月の第15期中央教育審議会の「第1次答申」において答申されて以来議論が行われている（たとえば，樋口を参照のこと）小学校への外国語教育の導入が何年生からになるのかという問題が気になってくる。「対象は小学校3年生以上で、週2時間以上が割り当てられる可能性が高い」（JACET 42）という予想もある。小学校への外国語（英語）教育の導入には，いろいろな問題もあるが，少なくとも英語の音声面の習得にはかなり有効ではないかと予測はできる。ネイティヴ並みに基礎的な音声を習得することにつながるかも知れない（ということはつながらない可能性もあるということである）ので，IPAが不必要になり，辞書も英英辞典の表記で十分になるかもしれない。1998年11月19日に文部省は，2002年から始まる完全学校週5日制の小中学校で使われる学習指導要領案を発表した。まだ詳細ならびにどのように運用されるかは不明だが，新聞報道によると，英語教育に関し

ては1996年7月の「第一次答申」からは大幅に後退しているようであり，日本の青少年が高校卒業までにネイティヴ並みの英語の基礎的な音声を習得しているという事態は起こりそうにない。

さて，たとえ，小学校への英語教育がどうなろうとも，現在の大学生は，ネイティヴ並みの基礎的な音声を取得しておらず，IPA リテラシーもとても十分とは言えない。さらには，日本の中高の英語教育においては，文部省の学習指導要領の「音声指導の補助として，発音の表記を用いて指導するよう配慮するものとする」(109) の言葉通り「配慮」されているだけで，卒業生にはIPA リテラシーがあるとは言えない。言わば，IPA は大学の英語教育に託されていると言ってもいいであろう。大学生が，英語の基礎的な発音の調音も聞き取りも十分正確にできず辞書の発音表記が読めないと言うのは，やはり由々しき事態であろう。大学の英語教育でIPA リテラシーを身につけさせるべきなのではないだろうか。効率的に行えば，おそらく90分の授業3回ほどでできる。さらに私が英語のリスニングとスピーキングの習得に必要だと考えるのは，音のリエゾン・脱落・同化などの現象とリズムとイントネーションである。これらは，英語のリスニングとスピーキングの基礎と言えるものであり，大学入学したての学生にしっかりと習得させる必要があるだろう。

引用文献

安藤昭一編『英語教育　現代キーワード事典』，増進堂，1991年。
今里智晃・土家典生『英語の辞書と語源』スタンダード英語講座4，大修館書店，1984年。
植村研一「外国語学習は何歳まで可能か：脳のメカニズムから見て」，『英語教育』1998年6月号：11-13。
大谷泰照「外国語学習としての英語の到達点」，『英語教育』1991年12月号：8-10。
河合忠仁「第2言語学習の開始時期―諸外国の事情から考える―」，『英語教育』1998年6月号：20-22。
JACET 教育問題研究会編『英語科教育の基礎と実践―新しい時代の英語教員をめざして』，三修社，1998年。
白畑知彦「外国語学習の臨界期をめぐる議論」，『英語教育』1998年6月号：8-10。
土屋澄男『英語科教育法入門』，研究社，1990年。
樋口忠彦ほか編『小学校からの外国語教育―外国語教育改革への提言』，研究社，1997年。
山田恒夫・足立隆弘・ART 人間情報通信研究所『英語リスニング科学的上達法』，講談社　ブルーバックス，講談社，1998年。
渡部昇一『英語の歴史』スタンダード英語講座3，大修館書店，1983年。
『中学校学習指導要領』，文部省，1989年。
『高等学校学習指導要領』，文部省，1989年。

《資料１》　IPA に関するアンケートとテスト結果

【高校の英語教育と IPA】

◇高校時代に IPA を学習したかどうか

	平成７年度（101名）	平成８年度（103名）	平成９年度（101名）
まったく学習しなかった	43%（43名）	40%（41名）	42%（42名）
学習した	57%（58名）	60%（62名）	58%（59名）

＊平成６(1994)年４月より高等学校の英語教育において学習指導要領が改訂された。したがって，平成９(1997)年３月高校卒業生とそれ以前を比較した。

	平成８年以前の高校卒業生（223名）	平成９年高校卒業生（82名）
まったく学習しなかった	42%（93名）	40%（33名）
学習した	58%（130名）	60%（49名）

◇ IPA 学習者の学習程度

	平成７年度（58名）	平成８年度（62名）	平成９年度（59名）
ほぼすべての発音記号	2%（ 1名）	3%（ 2名）	2%（ 1名）
受験問題を通して	93%（54名）	89%（55名）	90%（53名）
その他	5%（ 3名）	8%（ 5名）	8%（ 5名）

◇どこで IPA を学習したか（複数回答可）

	平成７年度（58名）	平成８年度（62名）	平成９年度（59名）
高校	49名	50名	52名
予備校や塾	7名	6名	8名
自分で	3名	6名	5名
その他	1名	2名	1名

【大学の英語教育と IPA】

◇高校卒業後に IPA を学習したかどうか

	平成７年度（101名）	平成８年度（103名）	平成９年度（101名）
学習しなかった	81%（82名）	83%（85名）	77%（78名）
学習した	19%（19名）	17%（18名）	23%（23名）

◇ IPA 学習者の学習程度

	平成７年度（19名）	平成８年度（28名）	平成９年度（23名）
体系的にほぼすべて	5%（ 1名）	7%（ 2名）	4%（ 1名）
部分的に	95%（18名）	93%（26名）	96%（22名）

＊私がすべてのクラスで教えたため，これは除外した。

◇どこで IPA を学習したか（複数回答可）

	平成７年度（19名）	平成８年度（28名）	平成９年度（23名）
大学（クラス外）	15名	23名	20名

英会話学校	1名	1名	2名
自分で	2名	4名	2名
その他	3名	5名	5名

＊大学（このクラス）は，私がすべてのクラスで教えたため100％であり除外した。

◇発音の区別ができない（調音）

	平成７年度（58名）	平成８年度（62名）	平成９年度（59名）
a. best と vest	41％（24名）	34％（21名）	36％（21名）
b. think と sink	26％（15名）	23％（14名）	31％（18名）
c. read と lead	71％（41名）	65％（40名）	68％（40名）
d. she と sea	31％（18名）	24％（15名）	27％（16名）
e. cap と cup	36％（21名）	40％（25名）	29％（17名）
f. law と low	45％（26名）	40％（25名）	39％（23名）
g. hat と hot	34％（20名）	31％（19名）	29％（17名）

◇発音の聞き分けができない

	平成７年度（58名）	平成８年度（62名）	平成９年度（59名）
a. best と vest	26％（15名）	27％（17名）	36％（21名）
b. think と sink	36％（21名）	32％（20名）	37％（22名）
c. read と lead	52％（30名）	55％（34名）	47％（28名）
d. she と sea	40％（23名）	31％（19名）	42％（25名）
e. cap と cup	22％（13名）	23％（14名）	20％（12名）
f. law と low	31％（18名）	19％（12名）	36％（21名）
g. hat と hot	35％（20名）	39％（24名）	44％（26名）

◇発音記号の識字ができない

	平成７年度（58名）	平成８年度（62名）	平成９年度（59名）
[θ]	35％（20名）	31％（19名）	37％（22名）
[ʃ]	29％（17名）	23％（14名）	33％（20名）
[ð]	35％（20名）	26％（17名）	36％（21名）
[ŋ]	35％（20名）	37％（23名）	42％（25名）
[j]	88％（51名）	84％（52名）	90％（53名）
[ə]	52％（30名）	60％（37名）	59％（35名）
[ɔ]	67％（39名）	48％（30名）	58％（34名）

◇発音記号学習は英語の発音と聞き取りに必要か。

	平成７年度（101名）	平成８年度（103名）	平成９年度（101名）
必要	84％（85名）	87％（90名）	82％（81名）
不必要	16％（16名）	13％（13名）	18％（19名）

《資料２》　IPA に関するアンケートとテスト

【広大】
［対象］
平成７・８・９年度の一年生　７年度101名，８年度103名，９年度101名
学部は無作為
［実施時期］
一年次の後期（広大はセメスター制なので２セメスター。二人の教官による二つの英語の授業を既に前期に受講し，二人の教官による二つのクラスの英語の授業を受けている最中である）。ただし，平成９年度は一年次の前期に実施（この時点では，２人の教官による二つの英語の授業をちょうど受講している最中である）。
【信大】
［対象］平成10年度の理学部１年生25名，人文学部２年生34名，人文学部３年生18名，人文学部４年生10名（信大の人文の２・３・４年生は英語関係専攻者が６割程度）
［実施時期］平成10年度前期

発音記号（International Phonetic Alphabet）に関するアンケート

1.　あなたは，何年生ですか。また，出身高校と卒業年次を教えてください。
2.　高校時代に英語の発音記号を学習しましたか。
　　a.　学習した　　b.　まったく学習しなかった
3.　２でａ.と答えた方にのみたずねます。どのくらい発音記号を学習しましたか。
　　a.　ほぼすべての発音記号を学習した　　b.　受験に出る発音問題を通して習った
　　c.　その他（　　）
　また，どこで学習しましたか。（複数回答可）
　　a.　高校
　　b.　予備校や塾　　c.　自分で　　d.　その他（　　）
4.　今現在あなたは以下の単語の下線部を区別して発音できますか。できるものを丸で囲んでください。
　　a.　best と vest
　　b.　think と sink
　　c.　read と lead
　　d.　she と sea
　　e.　cap と cup
　　f.　law と low
　　g.　hat と hot
5.　今現在，以下の発音記号を発音できますか。
　　a.　[θ]
　　b.　[ʃ]
　　c.　[ð]

d. [ŋ]
e. [j]
f. [ə]
g. [ɔ]

6. 高校卒業後に発音記号を学習しましたか。
a. 学習した　　b. 学習しなかった

7. 6でaと答えた方にのみたずねます。どの程度学習しましたか？
a. すべての発音記号を体系的に学習した　　b. いくつかの発音記号を学習した
また，どこで学習しましたか。(複数回答可)
a. 大学（このクラス）　b. 大学（このクラス以外の英語）　c. 大学（専門科目で）
d. 英会話学校　　c. 自分で　　d. その他（　　）

8. 発音記号を学習せずに英語を正しく発音をし正しく聞き分けることができると思いますか。
a. できない　　b. できる

発音記号聞き取りテスト

発音された単語がどちらか答えなさい。

a. best と vest
b. think と sink
c. read と lead
d. she と sea
e. cap と cup
f. law と low
g. hat と hot